

プロム：アメリカの高校の最も象徴的なダンス

ヘイリー・コックス

レンタルしたスーツ、華やかなドレス、豪華な食事、ぴかぴかのリムジン、写真、ダンス、コサージュ。

アメリカで5月は、高校の最上級生にとっては重要な月です。学校生活最後の月で、最大のダンスパーティーであるプロムを主催する月です。高校生たちが何週間も悩んで、デート相手に申し込む勇気を奮い立たせる季節です。そしてそのデート相手が受け入れてくれるのを必死に願うんです。

近年、アメリカの高校では、「プロムと一緒に行ってくれますか？」という質問に添えられる、壮大な意思表示である「プロムプロポーズ（プロムへのお誘い）」をよく見かけるようになりました。「プロム」と書いた100個のろうそくが車庫から道路への道に並んでいたり、学校の廊下の真ん中に大きな張り紙があったり、驚きのお誘いにミュージカル曲が流れたり。

そのような行き過ぎたプロムやお誘いは時に、結婚式に似すぎていると批判を受けることもあります。男の子はスーツを着ます。女の子は特別なドレスを着て、ヘアセットとメイクに丸1日を費やします。カップルや友人たちは写真を、時にはプロのカメラマンに撮ってもらいます。高価なチケット、豪華な食事、ダンス、夜遅くまで大切な人と一緒にいること。結局はただの学校のダンスパーティーであるのに、大げさで、結婚式のようなのです。

しかしそれは、アメリカの高校文化の実に象徴的な一面です。

あまりにもロマンチックに表現されてはいますが、プロムはカップルのためだけのものではないのです。ほとんどではないにしても、多くの生徒は友達との大きなグループでダンスに参加します。一人で来ている友達をプラトニックなデート相手に捕まえる人もいます。

私が高校の最上級生だったときは、車を持っていた親友とペアになりました。ヘアセットを私の行っていた美容院でしてもらって、私の家で着替えました。彼女はお父さんからコサージュをもらい、私の父も私にサプライズでコサージュを用意してくれていました。会場にはプロのカメラマンがいたので、私たちは写真を撮るために早く家を出ることはありませんでした。けれど、出発前に両親たちはスナップ写真を何枚か撮りました。

20人ほどの私たちのグループは、ダンスパーティーの行われるスタジオ近くにあるイタリアンレストランで待ち合わせました。私たちは長いテーブルに座って、食事をしながら近づきつつあるテストを嘆いたり、お互いのドレスをほめそやしたり、夏の計画についておしゃべりしたりしていました。アドレナリンが背筋をじわじわ上がって、胸に落ち着いたのを感じました。

ダンスパーティーは田舎の小さなダンススタジオで行われました。みんなが夕食を終え、パーティーに向かう頃、私の親愛なる、うっかり者の友達は、車にガソリンを入れていないことに気付いたのです。そうして私たち2人（そしてカメラマンも）はまばゆいドレスを着て、セットされた髪で、劇場から抜け出したようなメイクでガソリンスタンドに向かいました。気恥ずかしくて、愉快で、そしてまさに私たち2人がしでかしていたであろう出来事でした。カメラマンもついてきていたので、そこで素敵な写真を撮ってもらいました。

私の学校は小さくて、35人の生徒しか参加しておらず、男の子はそのうちのたった5人でした。最初の1時間は舞踏会でのラインダンス、ワルツ、チャチャチャやサルサ、横向きになったり、向かい合わせで輪になって踊ったりするダンスを教わりました。とても楽しかったです。

その後は自由で、ポップミュージックやダンスミュージックがビートを刻む中、ダンスフロアから抜け出してデザートをムッシュムッシュ食べたり、友達とばかげた写真を撮ったりしました。



真夜中近くにダンスパーティーは終わったのですが、友達は私の長年培った地理感覚よりも、方向音痴な自分の感覚を信用してしまい、飾り付けられたダンススタジオから私の家までの12マイル（20キロ足らず）の道のりを帰るのに1時間もかかってしまいました。

6年が過ぎましたが、特に変わりはありません。17歳の弟が、この間の金曜日にプロムに行ったことを除いては。彼はダンスには行かないと大声で主張していました。彼のまだ彼女ではないガールフレンド（言い表すのは難しいですね）がプロムに誘ってくるまでは。彼はどこからか、私の推測できないところからスーツとドレスシューズを用意して、彼女にコサージュを贈りました。弟と彼女は、ディナーとダンス、そして友達と合流する前に町中で写真を撮りました。2人はダンスをしました。おそらく手も握りました。彼らはキスはしていません。もしくは、していたとしても弟は私には言いませんでした。けれど聞いたところで困りますよね。

私たち2人の間で、私たちはプロムに向けてやるべきことリストのほとんどにチェックを入れました。フェイスブックにアップされる素敵なアルバムから、もう二度と着ないかもしれない素敵な衣装まで。ああ、それからコサージュも。コサージュを忘れてはいけません。

訳: 松原加純 (Kasumi Matsubara)